

# 全世代が生き生き暮らすSDGsの近未来!!

## 市民総働で実現〈誰一人取り残さないまちづくり〉

### 地域資源の活用で目指す 活性化への新風

特定地域における「自然環境と人間の営み」が、時代を超え、どのように関係し合ってきたのかを全方位から検証し、その結果、地域に育まれた特徴的な歴史、文化、経済、生活様式などの森羅万象を総合的に考察する『地理学』的観点から見ると、安中市は非常に「多様性に満ちた都市」だ。その地理学的多様性は、安中市が現在持つ個性的な地域資源の数々から十分にかがいがい知ることができる。

現安中市は平成18(2006)年3月18日、旧安中市と旧碓氷郡松井田町との合併により誕生し、今年で15年の節目を迎えた。合併後の安中市の自然環境および地勢的特徴は、碓氷峠(旧松井田町)の存在が象徴している。標高1200mに位置する碓氷峠は、長野県(軽井沢町)との県境であり、中央分水嶺とも

なっている。碓氷峠に降った雨は日本海側(長野県側・信濃川水系)と太平洋側(群馬県側・利根川水系)に分かれ、海まで流れているのだ。

碓氷峠は神奈川県箱根峠と共に、古来、都のある西国側から見ると関東(坂東)への入口とされた。江戸時代には、東海道の箱根関所と同様、中山道に碓氷関所が設けられ、江戸城のある関東防衛の重要な前線拠点ともなった。

中山道随一の難所・碓氷峠と碓氷関所の存在は、峠を隔てて中山道の群馬県側に位置する旧坂本宿(現安中市、江戸から17番目の宿場)と、長野県側に位置する旧軽井沢宿(江戸から18番目の宿場)の成立要因ともなった。江戸方面へ向かう人々や西国方面に向かう人々の多くは、難所・碓氷峠の手前の宿場で休むか、峠を越えた向こう側の宿場で休むのが通例だったからだ。

現安中市域には旧松井田宿(江戸から16番

もてきひでこ  
安中市市長  
茂木英子



目の宿場)、旧安中宿(同15番目の宿場)、旧板鼻宿(同14番目の宿場)の旧跡もあり、旧中山道(現国道18号線)沿いに往時の面影を残す集落を形成している。

旧中山道69宿のうち、最も多くの宿場跡を現在有する都市は塩尻市(長野県)の五宿、次いで多いのが安中市と佐久市(長野県)の四宿だ。安中市の四宿のうち碓氷峠に最も近い旧坂本宿では、景観整備(地域活力基盤創造交付金による道路・景観再整備など)が平成24(2012)年に竣工。平成29(2017)



「入り鉄砲に出女」が特に厳しく規制された中山道の碓氷関所跡

年「土木学会デザイン賞」で奨励賞を受賞するなど、観光資源としての付加価値を高めている。

安中市ではさらに今年3月、「歴史の道中山道碓氷峠越整備基本計画」を策定。旧中山道・碓氷峠周辺約8kmの区間内（安中市松井田地区（軽井沢町）に遺る文化遺産の活用を図り、同エリアの国史跡指定を令和6（2024）年度までに目指している。旧中山道・碓氷峠周辺約8kmの道筋は、旧安中藩が藩士鍛錬のため



「安政遠足」がルーツの人気イベント「安政遠足 待マラソン大会」(スタート地点)

に実施し、日本最古のマラソンともされる「安政遠足」にちなむ安中市の人気イベント、「安政遠足 待マラソン大会」のコースの一部でもある。

安中市にはその他、日本の近代化（殖産興業）に大きな貢献を果たした《旧碓氷峠鉄道施設（詳細は後述）や、官営《旧富岡製糸場》（世界遺産）と連携し、明治・大正・昭和の日本のシルク産業（養蚕・製糸）をリードした群馬の民間組合製糸《碓氷社》にまつわる遺構（旧碓氷社本社事務所など）もある。安中市の製糸業は今も健在だ。民間組合製糸・旧碓氷社の衣鉢を継ぐ存在ともいえる《碓氷製糸株式会社》（旧碓氷製糸農業協同組合）が現在、国



産生糸の6割（令和2/2020年）を生産しているのだ。この重要な事実は意外に知られていない。

「実は以前の安中市は、自らが持つそうした地域資源の有効活用が進まず、新たな地域の魅力を創出することもできず、結果として人口流出や地域経済の停滞に歯止めをかけられずにいました。

もともと地域活性化をテーマに市民活動をしてきた私が安中市議（4期）、群馬県議（2期中途中）を経た後に市長選に出ることを決意したのも、そうした安中の現状に歯がゆさを感じていたからです。

同時に、高齢化や人口減少が進む安中の現状を変えるには、老若男女が元気に生き生き暮らせるまちづくりや、人口流出を抑制し、逆に外からこちらに来ていただけのまちづくりを今こそ実践していかなければ、大変なこ



水路なども含め、往時の宿場町に近付け再整備された旧坂本宿



旧碓氷線の電化を推進した縁の下の力持ち「旧丸山変電所(国指定重要文化財)」



国産生糸の6割を今も生産している碓氷製糸株式会社

とになるという強い危機感がありました」

平成26(2014)年4月23日、合併後2人目の市長に就任した茂木英子安中市長(2期目)は、その言葉通り、就任8年目の現在に至るまで、群馬県初の女性市長ならではのきめ細かな着眼点による施策・事業の展開を通じて、安中市政に新風を巻き起こしている。

## 明治の日本の発展と共に 歩んだ近代化・産業遺産群

「地域資源を有効活用し、地域の魅力を創出していくには、安中市のポテンシャルとしての多彩な地域資源の存在を、まず市民に再認識していただく必要があります。同時に市

外の人々にも、その魅力を幅広く発信していかなければなりません。

私が安中市政のメインテーマとしているのは《市民総働のまちづくり》と《誰一人取り残さないまちづくり》です。最終的にそれを実現するためにも、市民の皆さまには地域への愛着を深め、《総働》の精神で行政と手を携えつつ、自分たちの手で地域の魅力を再創出していかうとする機運を醸成していただきたい。同じことは市職員、安中市を拠点とする事業者や団体などの方々にもいえます。

地元にはとても貴重な地域資源がたくさんあるということを、安中市に関係する全ての皆さまに改めて知っていただくには、その魅力に引き付けられ、外から来られるたくさんの方

光客に評価していただき、中には移住・定住をしていただける方も出てくるというような《流れ》を、自ら創出していくことも重要です。

かつて四つの宿場町を抱えていた安中は外部との交流が盛んな地域でした。地域が持つそのDNAは今も生きています。市民参加の各種事業やイベントの実施、観光振興のためのボランティアガイドの育成などを通じて、安中市の魅力を総働で発信することで、そのDNAをも再生していければと考えております(茂木市長)

くしくも茂木市長の就任から3週間ほど前の平成26年4月1日には、隣接する富岡市・軽井沢町と安中市の2市1町が「観光連携協議会」を発足していた。そして、観光連携協議会が2市1町に共通する魅力として、最初に発信しようとしていたのは「明治の産業遺産と近代化遺産」(富岡市の旧富岡製糸場、安中市の旧碓氷峠鉄道施設、軽井沢町の旧三笠ホテル)だった。

広域連携によるこうした地域資源の積極的発信は、就任したばかりの茂木市長の方針とも合致していた。そこで行政による発信活動だけでなく、民間(市民や事業者)との連携による情報発信も必要とする考えから、茂木市長は地域DMO「一般社団法人安中市観光機構(以下、安中市観光機構)」の設立を企画。平成29年4月に立ち上げ、2市1町による観光連携協議会の傘下で主にイベントの企画や情報発信を担わせている。

# 安中市

市 政 ル ポ

(群馬県)



アプトの道のハイライト「めがね橋（国指定重要文化財）」は川底からの高さ31m!!



明治11（1878）年に設立された組合製糸（明治17／1884年から碓氷社）に始まるシルク産業の遺構も、近代化遺産としては非常に貴重だが、旧碓氷峠鉄道施設の遺構はより充実している。

「旧碓氷峠鉄道施設とは、明治26（1893）年4月に開通し、昭和38（1963）年に廃止された「横川〜軽井沢間」の旧碓氷線11・2kmの区間にまつわる鉄道施設群を指します。中



国内外のハイカーに絶大な支持を受ける旧碓氷線の廃線跡「アプトの道」

山道最大の難所・碓氷峠に鉄道を敷設した形の旧碓氷線（現在、安中市域の旧横川駅〜旧熊ノ平駅間の廃線跡が、遊歩道・アプトの道として整備されている）は、最大傾斜が国内最大級の66・7パーミル（1000m進むごとに標高が66・7m上がる、または下がる）とされており、わずかに約11kmの区間に隧道<sup>せうじょう</sup>26カ所、橋梁18カ所を数えるという日本鉄道史でもまれに見る難工事でした（茂木市長）

初期の運行列車はSLだが、この急傾斜を上り下りするために採られたのがアプト式（レール間に刻みを付けたラックレールを敷き、機関車にも同様の刻みの歯車を付け、噛み合わせながら進む方式）だ。旧碓氷線は明治45（1912）年、アプト式のまま全国の幹線鉄道で初の「電化」も実現。その際に建設した旧丸山変電所は、七つの橋梁や11カ所の隧道と共に国指定重要文化財となっている。通

常「旧碓氷峠鉄道施設」と表現する際は、それらの重要文化財を中心とする周辺一帯の環境も含む。そして安中市観光機構が平成30（2018）年10月から始めた、旧碓氷峠鉄道施設を巡る「廃線ウォーク」は、今年3月に「第25回ふるさとイベント大賞」で優秀賞を受賞するなど人気イベントとなっている。

## みんなで地域を考え行動する 《市民総働のまちづくり》

「国が明治時代に、そうまでして碓氷峠に鉄道を敷いたり電化を急いだりしたのは、江戸時代の中山道の重要性と同様、碓氷峠が日本の近代化にも不可欠な交通結節点と捉えられていたことを意味しています。旧碓氷峠鉄道施設は同時に、碓氷峠の周辺エリアに開かれた旧宿場町をはじめ、現在の安中市に至るまで先人たちが切り開き、現代にまで続く地域の人々による厳しい自然環境との共生の歴史を、象徴的に物語る存在ともいえます。

旧碓氷峠鉄道施設は廃線ウォークの人気コース（一部、前出・アプトの道）でもありますが、旧碓氷峠鉄道施設をはじめとする鉄道の歴史を、マニアもファミリーも楽しく学べる施設としては、平成9（1997）年に廃線となった信越本線の横川運転区跡地を活用し、平成11（1999）年に開園した《碓氷峠鉄道文化むら》があります。碓氷峠を走った電気機関車や特急あさまのほか、多数の鉄道



クラウドファンディングでよみがえったSLあぶとくん（碓氷峠鉄道文化むら）は全世代に大人気



厳しい研修を受けて初めてできるEF63電気機関車の運転体験はマニア注目の（碓氷峠鉄道文化むら）



「碓氷峠鉄道文化むら」のメイン施設「あさま・鉄道展示館」

車両が展示されており、アプト式以降の時代から電気機関車として活躍したEF63形の運転体験、《SLあぶとくん》やミニSLなどの人気アトラクションもたくさん用意されています」（茂木市長）

《SLあぶとくん》は、国内でも貴重な、石炭を燃料に走る本格的なSLだ。開園以来の人気アトラクションだが、老朽化のため、昨年から約1年半、運行を停止していた。復活のための修理関連費用は約1300万円。新型コロナウイルスの影響で臨時休園が相次いだため、その費用の捻出にも苦慮していた。この危機に際し、茂木市長が発案したのが「クラウドファンディングによる資金の調達」だった。「クラウドファンディングの利点は、資金

の調達ができる可能性だけではありません。ネットを通じて公募することにより、全国の人々に《SLあぶとくん》のみならず《碓氷峠鉄道文化むら》の存在、さらには文化財としての《旧碓氷峠鉄道施設》や、安中市の存在自体もアピールできる可能性があります。このアイデアについては、実は『無理でしょう』という声が多かったのですが、実際にやってみたら、おかげさまで全国から800人以上の支援があり、総額も1300万円に達しました」（茂木市長）

かくして今年7月4日の日曜日（取材は6月30日）に《SLあぶとくん》は復活し、子どもたちの大歓声に迎えられたのだった。茂木市長は群馬県初の女性市長として「安

中市政に新風」を起こしてきたと先に書いた。前出・安中市観光機構の立ち上げや「廃線ウォーク」その他の実践などと共に、このクラウドファンディングの実行と成功も、そうした「新風」の事例の一つだ。

さらに今夏、《碓氷峠鉄道文化むら》では新企画のオートキャンプを実施する予定で、そのイベント企画を担当したのは《碓氷峠鉄道文化むら》を10倍楽しむ会》のメンバーだった。

「この企画は閉園後の夜間に、鉄道展示施設の前にテントを張ってキャンプしたり、アウトドアアクッキングしたりするという楽しい催しです。《碓氷峠鉄道文化むら》を10倍楽しむ会》は、私が市長就任後の割と早い時期に発案したもので、民間の視点から碓氷峠鉄道文化むらを盛り上げていこうという趣旨の会で

す。官民連携で入園者減少に歯止めをかける目的の下、昨年1月に発会式を迎えたばかりですが、次々と新企画を打ち出しています」（茂木市長）

《碓氷峠鉄道文化むら》を10倍楽しむ会》によるこうした新企画は「何よりも碓氷峠鉄道文化むらの職員たちのモチベーションを刺激しています」と茂木市長。茂木市長が初の女性市長として「安中市政にもたらしている新風」は、まさにこうした自らの市政のテーマ、官・民・事業者・団体などがみんな地域を考え、行動する《市民総働のまちづくり》に根差した案件に多く見られるように思われる。

### コロナ禍でより一層輝く 《誰一人取り残さないまちづくり》

同様の自発的動きは市民の側にも浸透しつつあり、市民活動を後押しする支援事業も多彩に展開されている。例えば、まちづくり専門知識や一芸的な能力を発揮できる人を登録する人材バンクの設置、子ども食堂など交流の場への創設支援、地域住民を中心に高齢者や障害者などの見守り活動等を行う《ちいき生活応援隊》への支援などだ。

「中でも私が重視しているのは、そうした活動の全てに、なるべく『多世代交流』の要素を持たせたいということです。これは私の安中市政におけるもう一つのメインテーマ《誰一人取り残さないまちづくり》にも通底して



高齢者や障害者を支援する「ちいき生活応援隊」の活動



車いすでも乗れる乗合タクシーも「誰一人取り残さないまちづくり」の一環



多世代交流型子育て拠点施設「あんなかスマイルパーク」の利用対象者は全世代

くる重大な要素です。どちらも鍵となるのは『人と人とのつながり』です。とりわけ、赤ちゃんからお年寄りまでの多世代による交流こそは、コミュニティにおける持続可能な未来の基本。ひいてはSDGsのまちづくりの基盤と考えます。

今年4月にオープンした多世代交流型の子育て拠点施設《あんなかスマイルパーク》は、この『人と人とのつながり』を育む拠点であり、世代を超えて互いに育ち合う拠点にしていききたい。同時に誰もが、気楽に人とのつながりを育むことができる第一歩になれるような、そんな施設にしていきたいと考えております(茂木市長)

《誰一人取り残さないまちづくり》の観点からは、今年4月1日からスタートしたLGB TQカップルを公認する《安中市パートナー

シップ宣誓制度》も、今後の推移が注目される。

「パートナーシップ宣誓制度の導入は、群馬県内の市町村では大泉町、渋川市に次いで3番目になります。私が目指す《誰一人取り残さないまちづくり》は、LGBTQカップルだけでなく、外国人居住者や、何らかの理由で引きこもり生活をせざるを得ない人々など、旧来の制度のはざまではなかなか声を上げることができずに苦しんでいた人々も含め、安中市に住んでくださっている市民の誰をも、決して独りぼっちにさせたくないという気持ちから掲げた取り組み目標です。

そして、もう一つの目標である《市民総働のまちづくり》の市民とは、安中市を構成するあらゆる立場の人という意味であり、そこにはいろいろな意味でのマイノリティも当然含まれてきます。私にとっては、何の

不思議もないことなのです」  
(茂木市長)

新型コロナ禍に揺れる昨今、世は何かと分断化が進みつつあるかのような殺伐たる様相が目立つ。それだけに、より一層、茂木市長が目標とし、たゆまず実践する《誰一人取り残さない市民総働のまちづくり》というテーマは、優しく胸に沁み入ってくる。

(取材・文：遠藤隆／取材日：令和3年6月30日)